

その西方に至つたので、こゝに東顧の憂を斷つ爲にかゝる必要を感ずるやうになつたのであることを記して置きたい。偕て此の如くにして明と通じてからは、帖木兒からの貢使は屢々明の記録に記されて居る、即ち洪武二十四年（一三九一年）、二十五年（一三九二年）、二十七年（一三九四年）、及び二十八年（一三九五年）に來貢し、其後絶えて永樂五年にまた始まつて居る。かく洪武二十年以來は殆んど毎年入貢して、時には一年兩度に迄及んで居たのが二十八年からは俄かに斷絶したのみならず。同時に帖木兒は明に對して全く敵對行動を執る様になつた、皇明實錄、殊域周咨錄、明史など、此の頃の史籍に記されて居る所によると、此の年（二十八年）命を奉じて撒馬兒罕の入貢に報じた使節給事中傅安等の一行は、帖木兒の爲にその國に抑留せられて、永樂五年迄歸ることが出来なかつたのである。永樂五年といへば彼の死後の翌々年で、其の間實に十一年を経て居る、かく長き年月の間、明の國使を抑留して居つた帖木兒は、その間明に對して如何なる手段を廻らして居つたか、今敘述の便利上彼が始めて明使を抑留した洪武二十八年以來、支那征伐に上るに至る迄の行動を年次に従がつて掲げて見やう、

洪武二十八年（一三九五） 波斯征伐（一三九三年より續けるもの）

同 二十九年（一三九六） 波斯征伐よりサマルカンドに還る

同 三十年（一三九七） サマルカンドにあり

同 三十一年（一三九八） 印度征伐

建文元年（一三九九） デリーに入り四月サマルカンドに歸る、ハマダン、タブリヅ地方を征す

同 二年（一四〇〇） チェオルチア征伐

同 三年（一四〇一） バグダッド、アレップォー征伐